
曹騰物語

MD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曹騰物語

【Nコード】

N8940Y

【作者名】

MD

【あらすじ】

曹騰に転生を果たして早62年。

波瀾万丈の二度目の人生も既に隠居生活。

あとはゆっくりと死を待つのみ。

そんな爺さんが主人公の物語です。

* 不定期な更新となりますのでご了承下さい

プロローグ いつもの日々

何もない。

何も無い真っ白な空間。

これは夢だ。

声は出ないようだが、不思議と意識ははっきりしている。では、いったい何の夢だろうか。馬に乗り草原を駆ける訳でもなく、大海原を船で駆ける訳でもなく、ただ白い空間にいるだけ。こんな夢は初めてだ。

時間はどの位過ぎたのだろう。数秒か数時間か或いは数日か。長いように思えるが短いようにも思える。全てが白一色の空間では時間感覚は元より、平衡感覚さえも維持することができない。

音の無い空間。

耳では聞こえないが誰かに呼ばれているのが分かる。何かが頭の中に直接入ってくる。恐らく自分を起こしてきた弟子の誰かだろう。

頑張つて起こしている雰囲気は伝わってくる。この雰囲気は那奈辺りだろうか。そんなことを考えている間に、真っ白だった空間に

は蜘蛛の巣状に罅が広がり始める。

夢の終焉だ。

本当にこの夢は何がしたかったのだろう。

まるでガラスが割れるかのように砕けていく空間。上を仰ぐと意識が薄れていくのが分かる。もうすぐ目が覚める。

「 よ 「

耳元からも那奈の声が徐々に鮮明に聞こえ、

『久しぶりだね、曹騰。』

二回目の人生は楽しんでいるかい？』

不意に時間が止まる。

『君に二度目の生を与えて以来だから六十二年ぶりってところだね。どうだい今の生活は？ 娘がいて孫がいて優秀な弟子がいる。いいね、幸せそうだね。』

そんな君に一つお知らせだ。ああ、そんな警戒しなくてもいい。君の命を貰うとかそんなんじゃないから』

虚空より突然に現れた一人の青年。伸ばした髪を後ろで一括り、ピシッと着こなしたスーツでデキる雰囲気醸し出しているのは「愛敬」。

この青年こそがこの世界の『神』である。

『もう少し友好的にして欲しいところだけど。まあいいや。話を進めるよ？』

実はこの世界に一人、君のいた世界から人間がやってくる。君と違って転生することなくそのままの姿でね』

困ったものだよ、と青年は溜息を吐きながら話を続ける。

『世界と世界の狭間には境界線があつてね、ほんの数千年に一度、人が一人通れるか通れないかくらいの穴が開いちゃうことがあるんだ。』

今回の人間は相当運が悪かつたんだろうね。その穴に落ちちゃつたんだよ。だから、たぶん二ヶ月くらいしたらこの国のどこかに落ちると思う』

呆然とする自分の反応を気にすることなく、青年の話は終わる。

「で、それを聞いたわしにどうして欲しいんじゃない？」「
』どうもしなくていいよ。」

言ったでしょ。今回はお知らせだって。保護するなり抹殺するなり味方にするなり君の好きにしてよ。

他に質問とかある？ 今は暇だし何でも答えてあげるよ？』

青年はゆっくりと周囲を歩き始める。

それに構うことなく考えてみる。青年に聞きたいこと。青年は腐つても神だ。何を聞いても答えてくるだろう。けど、知りすぎてしまつのも面白くない。だから質問は一つだけ。

「その人間に贈り物は渡したのか、これだけ教えてくれれば充分じゃ」

『はあ。相変わらず欲がないね、君は。答えは否だよ。僕を通して世界を渡らない限りは贈り物を渡さないからね』

「それだけ分かれば充分じゃわい」

自分は成年から贈り物を幾つか貰っていたりする。

『君はきつちりと僕を通して世界を渡ったからね。贈り物を渡すのは当然だよ。むしろ今からでも贈り物を追加してあげようか？ この世界なら投影魔術とか斬魄刀とかオススメだよ？』

「贈り物は今のでも充分すぎるわい。というか貰いすぎたと思ってるくらいじゃ」

自分が貰った贈り物は五つ。

本当は三つまでらしいが選んだ贈り物が余りに地味すぎた。君は欲が無さ過ぎると説教されたあげく、二つ贈り物を増やされたので合計五つになった。

ちなみに貰った贈り物は

- ・ 屈強な精神
- ・ 料理上手
- ・ 病気になるらない健康体
- ・ 事故・災害に遭遇しない幸運
- ・ 面倒事を察知できる直感

普通に生活していくには充分すぎるレベルだ。

『むう。君は本当に欲が無さ過ぎるよ。やっぱりこれじゃあ僕の気が済まない』

「あー、そんなに贈り物が送りたいのか？」

『当然だよ。あれだけしか送らないケチな神様って思われるのも嫌だし、ね？』

「これで最後じゃぞ？」

自分が使っている矛。あれを絶対に折れない矛にして『できたよ』

……はあ、何か弟子を相手にしてる気分じゃわい」

本当に贈り物はこれで充分。これ以上貰うと反動で何か起こりそうで怖い。

『それじゃあ、僕はこれで失礼するよ？ 悔いの無い二度目の人生を楽しむように。ではでは』

バイバイと手を振って去っていく青年。

青年が消えると同時に、意識は闇に堕ちて

「お爺ちゃん、朝ですよー！ 起きて下さいーい！」

耳から聞こえてきたのは少女の声。

目を開けてみれば、そこにいるのは弟子の那奈だ。腰まで伸ばしたサラサラの金髪に、胸元を大胆に切り開いた黒のチャイナ服が目印の元気な女の子だ。

「おはようじゃ、那奈。朝はやっぱり那奈に起こして貰うのに限るのう」

「あ、やっと起きましたね。おはようございます。若干、寝呆けているような気がしますけど良しとします」

「手厳しいのう。朝食はもうできとるか？」

「もうそろそろできると思いますよ？ 外で待ってますから着替えて来て下さいね」

那奈は軽い足取りで部屋を出ていく。

窓から差し込む日差しを気持ちよく感じる辺り、今日は春つららかな一日になりそうだ。ゆっくりと朝の空気を楽しんでいると、

「お爺ちゃんまだですかー？ 先に行きますよー？」

「どうやらゆっくりし過ぎたらしい。」

那奈を待たせ過ぎるのも悪いと思い、慣れ親しんだ藍染めの浴衣を着て部屋を出る。

「待たせたのう那奈。では朝食を食いに行くとしようか」

「はい、行きましよう。わたし空腹で倒れちゃいそうですし」「
「かっかっか。なら急いでいくとするかのう」

口では急ぐとは言つものの、歩くペースは変わらない。部屋から食堂までの距離は二十メートル前後。那奈の軽口に相づちを挟み、食堂までの短い道のりを充分に楽しむ。

「おはようございます」「おはようございます」「おっはー」「おやすみー」「おは」「おはるー」

食堂に辿りつくまでには数人の弟子ともすれ違つ。挨拶は個々それぞれ。公式の場でもない限り、言葉遣いなども注意することもない。

「良い匂いじやのう。今日の当番は琉奈と紅かの？」

「ええ、琉奈と紅です。二人とも久しぶりの当番だからはりきちゃってますよ」

「あの二人は料理好きじゃからの。飯がうまけりや問題ないわい」

食堂の中に入れば、そこには既に美味しそうな匂いが漂っている。

「あ、じいちゃん！ おはよう！ ご飯できてるよー！」

「やっど起きてきたか爺さん。飯は食うだろ？ 魚と肉どっちがい

い？」

那奈と二人、席に着くと直ぐに声を掛けてきたのは琉奈と紅。元気よくじいちゃん呼んでくれるのが琉奈。那奈の実の姉であり、大の料理好き。肩口で揃えた金髪、妹とお揃いの胸元を大胆に開いた白のチャイナ服が目印だ。

爺さんと愛想無い呼び方をするのが紅。ざつくばらんに伸ばした琉奈より少し長めの金髪と赤い浴衣が目印。年に似合わない落ち着きを持った琉奈と同じ年の少女だ。

「おはようじゃ。気分的には魚じゃな。しかし、二人の飯は久しぶりじゃの。楽しみじゃわい」

琉奈と紅は一度厨房に戻ると、直ぐに四人分の食事を持って戻ってくる。

「では、頂くとしようかの。」

ところで那奈や。今日のわしの予定はどうなってる？

何もなければ釣りにでも行きたいんじゃないか？」

「問題ありません。遠慮せずに楽しんできて下さい、と言いたいところですけど……先ほど華琳さんからの使者がやってきましたので」「華琳からの呼び出しじゃな？ 最近顔を見せとらんかったから淋しくなってきたのじゃな」

「いえ、先日から街に卸しているお酒について話があるそうです」「はあ。やっぱり可愛げがないのう華琳は。しかももう見つかるのは早いのも。新作『白美人』は数本しか卸していないはずなんじゃが……」

やっぱり山に籠もって釣りをしておくべきか？

孫である華琳は酒にうるさい。今回の『白美人』は華琳には何も

報告していない真正正銘の完全新作である。それを自分が飲む前に店に卸したとすれば待っているのは説教しかない。

「仕方がないの。明日にでも華琳のところ顔を出すとして、今日はゆっくりと川で釣りでもするかろう」

曹騰、陳留に行く 上

荒野を移動するのは二人と一頭の馬。

金髪で浴衣の女と白髪で浴衣の爺さん、紅と曹騰である。

「んー、俺より那奈のほうが強いと思うぞ？ この頃は模擬戦やつても五本に二本しか取れないし」

「那奈のやつは普段は大人しい癖に戦闘になると狂うからのう。あれさえなければ……ほんとに惜しいのう」

屋敷を出発してから三日目。弟子の紅と中身のない会話を楽しみつつ陳留を目指す。

赤い浴衣をゆったりと着流し、右腰に二本の短槍を携えた紅。荷物を載せた馬を引いていてもそれなりに様になる。それに対して自分分は紺色の浴衣を適当に着崩して、自称の神様に強化して貰った矛を杖代わりに緩やかなペースで歩いている。

今回の旅で馬の背に乗せているのは幾らかの酒瓶とつまみ、それに数冊の書物だけだ。本来なら可愛い孫のため、酒瓶を数本どころか酒樽まる一個とも考えたのだが、

「なあ、爺さん。今回、華琳に持って行く酒ってこれだけで良かったのか？ こんな量、春蘭が飲んだら一刻も持たないぞ？」

「『白美人』は 袁塊 との宴会で殆ど飲んでしまっただけなのう」

「……初夏なのに冬が到来したよ、爺さん」

ジト目の紅に睨まれるが、気にしない。

酒の件に関しては『白美人』がもう殆どないのは事実。二年ぶりに合った親友と呑んだのだ。後悔も反省も何もない。

これで華琳に呑んでしまったと言えば絶で首を刎ねられるのは分かっている。弟子が個人で確保していた分を交渉して瓶数本分を確保した。

まあ、本当に数本分なので弁で頑張つて誤魔化す必要があるのだが。

「なんだかんだ言ってるけど、華琳に会うのが楽しみなんだろ。爺さん？」

「そうじゃなあ。もう一年以上も会つたらんから。華琳に会うのは楽しみじゃわい」

紅が下手な鼻歌を歌いながら少し前を歩いていく。自分からの返事を聞いていない感じ、紅も久しぶりに華琳と会うのを楽しみにしているのだろう。最後に会ったのは陳留の刺史に任命されたとき以来なので、華琳に会うのは実に一年と半年ぶりになる。

「どんな成長してるかな、華琳」

「紅の目に適うようなら仕官してもいいんじゃないぞ？」

「いや、遠慮しとく。まだ 時期 じゃないからな」

「で、爺さん。」「いじどこだ？」

「うむ。わからん」

屋敷を出発してから六日目。既に陳留についてもおかしくな

い。が、陳留の街どころか街道さえ見当たらない。何故か森の中にいる。

「俺はつい爺さんが道を知ってるものだ」と

「わしはつい紅が道を知っているものだ」と

二人して木に手をついてうなだれる。

幸いにしてこの森は食物も動物も豊か。兎に猪、熊に鳥と食料には困らない。

けど、

「『どうしたもんかなー』」

既に日は暮れている。

昼間のうちに集めて置いた木枝に火をつけ、絶対に折れない矛で貫いた猪を丸焼きにしながら、紅と二人で明日の対策を練る。猪は矛で貫いた直後に血抜きと内蔵処理を済まし、中に軽く香辛料と香草を詰めて焼いているので味のほうは保証できる。

「つと、いい感じに焼けてきたな。爺さんそろそろ食えるぞ?」

「では、頂くとしようかのう。と言いたいところなんじゃが」

猪の丸焼きを火の中心から外し、冷めないように火の側に転がしておく。表面は少し焦げるかも知れないが表面を少し剥けばいいだけなので気にしない。

今いるのは森の中、少しだけ拓けた広場のような空間。小川も近くに流れており、旅人が野宿するには最適な場所。また、山賊が獲物を待ち伏せるのにも最適な場所とも言える。

「あー……ちよっと説教かましてくるから先に食べていいぞ、爺

さん」

「食事時に現れるとは無粋な山賊じゃのう。飯は待っとくから早く戻ってくるんじゃないぞ?」

気配の数はおよそ三十。

木の陰や木の幹の上に隠れているが、服の一部がはみ出していたり小声で喋る声が聞こえてきたり。まだ奥に何人が伏せているみただが、いろいろとレベルの低そうな山賊だと判断できたので、手を出してこない限りは無視するつもりだったが、

「よりによって、紅がいるときに飯を奪おうと考えるとは……運がないのう」

「で、結局はどうしたんじゃない?」

場を離れてから五分と掛からず、紅は戻ってきた。

見た感じ、息も上がってる様子もなく傷を負った様子もない。

「全部で五十くらい居たけど、
大人しく帰ってもらったから気にしないでいいぞ爺さん」

肩をまわし筋肉をほぐす紅の姿を見ていると本当にたいした相手ではなかった様でひと安心。

山賊を追っ払った慇懃を兼ねて、腰にぶら下げていた瓢箪をひとつ紅の方へ投げてやる。

「ん? 爺さんこれは?」

「ちよっとした酒じゃ。遠慮無く呑んでいいからの」

瓢箪の口から中を覗いたり、匂いを嗅いだり怪しがる紅。その姿を肴に自分は懐から取りだした瓢箪の口を開けて中身を口の中に傾ける。

「……爺さん、この酒なんだ？ まだ屋敷にも下ろしてないだろコレ」

「うむ、もちろん内緒じゃ」

「そう言っと思った……はあ」

ため息をつきつつも紅は瓢箪の中身を口に含む。それと同時に、聞いてないぞといわんばかりのジト目で睨んでくる。

瓢箪の中は当然『白美人』ではない。かといって普通の酒でもない。『白美人』を参考にあらたに作成された酒『月下美人』。これは華琳どころか弟子の殆どに吞ませたことのない貴重な一品。偶然に小さな樽一つ分だけ取れた酒だ。紅が知らなくても当然だ。

「爺さん、これ華琳にバレたら相当にヤバイぞ」

「かっかっか、曹騰なだけに相当ヤバイか！ 紅も言っようになっただのう！」

「……爺さん」

「こ、こら！ そんな哀れみの視線を向けるでない！」

華琳には来年くらいにやるから問題ないわい！ まあ、バレそうになったら適当に誤魔化すでう！ 気にするでない！」

曹騰、陳留に行く 上（後書き）

感想や誤字の報告ありがとうございます
返信などはあまり書けませんがお励みになるのでありがたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940y/>

曹騰物語

2011年12月24日06時46分発行